

「やる気応援奨学金」レポート

シドニー海外研修プログラム 多文化主義・人権・市民社会

法学部政治学科三年 最上 治子 (私立浜松日体高校)



はじめに

私は法学部のアクティブラーニング海外プログラムという授業の一環で、二〇一五年二月一九日から三月八日までオーストラリアのシドニーでの海外研修に参加しました。先生とほかの受講生と共に海外研修を行うプログラムですが、「やる気応援奨学金」の支給対象となり、私も「二〇一四年度後期やる気応援奨学金一般部門」から奨学金をいただくことが出来ました。

プログラムの概要

このプログラムは、秋学期の事

前授業と春休みの海外研修を通して多文化主義・人権・市民社会について学ぶ専門総合講座です。二〇一四年度はシドニー大学平和紛争解決センター(CPACS)と提携して行われました。

プログラムでは、まず秋学期の事前授業で、「先住民の権利」「難民、移民」「ジェンダーと性的多様性」の三グループに分かれ、そこから各自テーマを設定し、日本とオーストラリアでの問題を調べました。また春の渡航では、CPACSの院生がメンターとなってオーストラリアのNPOや政府機関などにアポイントメントを取り、インタビューなどのフィールドワークを

行い、最後にその結果をプレゼンテーションやリポートにまとめました。

私の研究テーマは移民のための医療通訳でした。日本での調査で浜松を訪れた際に、言葉の壁が原因で病院を利用することをためらうという在留外国人の方々の話を聞いて、医療通訳者が普及すればこの問題が解決出来るのではないかと考えたからです。けれど日本では医療通訳の認知度は極めて低く、そもそも医療通訳という資格があるわけでもなく、そのほとんどがボランティアで行われているという現状が浮かび上がってきました。そこで移民大国のオースト

ラリアはどうなっているのか、詳しく知りたいと考えました。

シドニーに到着

渡航前、メンターと幾度もやり取りをする中で、日本でのリサーチや質問の質を問われ、出発時の私は完全に自信を失っていました。しかし、オーストラリアに着いた最初の週は、シドニーを一望出来るシドニータワーで食事をしたり、シドニー大学校内や併設された資料館を訪ねたりと渡航前のリサーチ漬けの毎日とは打って変わってリラックスした日々で、インタビュールに向けて心を落ち着けることが出来ました。

緊張のインタビュール

二週目の半ば、いよいよフィールドワークをする時が来ました。最初に訪問したNPOはMuslim Women's Associationと書いて、

ムスリム女性による女性支援を行う団体です。この団体に連絡を取ったきっかけは、在留外国人による現地の医療機関の利用が低いのは単に語学の問題だけではなく、

価値観や宗教的な問題も絡んでいるという記事でした。

CEOのマハ・アブドさんは、まず自宅職場に併設されたDV被害者をかくまうための施設を特別



Southeastern Sydney Local Health Districtインタビュー

に案内していただきました。部屋に入ると、想像していたような無機質な所ではなく、普通の家と何ら変わらないリビングがありました。壁には子供が描いた絵が貼られ、アブドさんが入居前と入居後では子供

たちの絵の色が暗い色から明るい色へと変わるのよ、と話してくださいました。部屋から庭へと続くスロープや遊具もあり、随所にアブドさんの工夫が見受けられました。以前こちらの施設で保護された女性にもお会いしました。その女性が当時のことを思い出し、涙する場面もあり、アブドさんの活動がいかに多くの女性を救ってきただかがうかがわれました。

アブドさんによると、ムスリム女性は宗教上の理由から女性医師の診察を望んでおり、また宗教や語学の問題のみならず、健康に関する知識が乏しい故に医療機関を利用しないケースもあるそうです。そこで近年在留外国人に対して乳ガン予防を呼び掛ける活動を行っているそうです。限られた時間の中で、とても内容の濃いインタビューとなりました。

次に私が訪問した場所は、Southeastern Sydney Local Health DistrictのMulticultural Health Serviceです。こちらは地域の健康センターで、在留外国人に健康に

関するサービスを提供しています。ここでは、オーストラリアで医療通訳者になるための方法、医療通訳者の労働条件や医療通訳の利用状況について質問しました。正直なところ、英語なので回答すべて聞き取れることは出来ませんでした。しかし私が理解した限り最初の質問に関しては少なくとも二つの方法がありました。一つはE-learningというインターネット授業を受けることで自宅にいながらにして勉強する形、もう一つは医療系の大学が医療通訳者になるための授業を開講し、それを受講する形です。

二番目の質問への答えは私の予想に反するものでした。それはオーストラリアでさえ、医療通訳者の給料は内容と見合っていないということでした。またTISといビスの利用率が低いことも分かりました。医師側の理由として、診察以外に医療通訳者を手配する時間を要する、患者の診察を出来る限り遅らせたくないということでした。一方患者は診察代に加え余分の代金を支払う必要がある、利用

するのが恥ずかしい、自分のカルテなど個人情報医師以外の他人に見られたくないなどプライバシーの問題もありました。更に運営する立場から、患者と医療通訳者のマッチアップが難しいこと、そして地域のエスニックグループは絶えず変化するのでニーズに追いつかないというのを伺いました。ただ Skype や電話なら TIS は無料で利用出来るので、このヘルスコミュニティーセンターを始め、滞在中にインタビュールした別の団体もこのサービスを利用していました。

担当のベリーさんは私のリサーチのために、と医療通訳者を育成する際に使われるDVDやキャンペーンのポスターなども提供してください、とても親切な方でした。

移民・難民の方々との出会い

こうした自分で企画するワールドワーク以外にも、シドニーでは「移民・難民」について考える機会が幾つもありました。

第二週の週末には一泊二日で世界遺産のブルー・マウンテンズに

行き、ブルー・マウンテンズ難民支援グループのバーティーに参加しました。スリランカ料理をいただきますながら、スリランカやアフガニスタン難民の方々からお話を伺いました。これまでの過酷な体験に心が痛みましたが、真摯に受け止めることが出来ました。

シドニー滞在の最後の週にはオーストラリアという町へ行きました。町を見渡すと、欧米人の歩く姿はなく中東やアジア、アフリカ系の姿を多く目にし、どこか別の国に行つたかのような錯覚に陥りました。私たちは、近くにあるモスクの見学に行きました。見学の予約もせず、スカーフで顔を覆うこともありませんでしたが、信者の方がモスクを案内し、イスラム教の基本原則を始め、礼拝の仕方などを教えてくださいました。特に印象的だったのは、天井からつるされた幾つかのシャンデリアにエミューの卵がくもの巣よけとして置かれていたことでした。信者の方は、突然の訪問にもかかわらず、ISIS でイスラム教のイメージが悪くなっている中、偏見を持たず見学

に来た私たちを喜んでくれました。私たちの抱くイスラム教のイメージはほんの一部でしかなく、ほかの文化や宗教を学ぼうとする姿勢はとても大事であると身をもって経験しました。

最後のプレゼンテーションとマルチ・グラ・パレード

こうした二週間半の総まとめがCPACSでのプレゼンテーションでした。皆が、それぞれのイン



ポスタープレゼンテーション

タビユー先で感じたこと、学んだことをいかに一〇分間に盛り込むか試行錯誤しました。準備時間が十分とは言えませんでした。リサーチをして実際にインタビュウを行っているので、自信を持って発表することが出来、非常に議論も盛り上がりました。

そしてこのプレゼンテーション後、シドニーの一大イベントであるマルデイ・グラ・パレードに行きました。元はゲイやレスビアンなどのセクシユアル・マイノリティーの方々が自身の権利向上のためのデモをしたことから始まったもので、歴史的にも大変意義のあるパレードです。レズビアンのパイク集団からパレードは始まり、夜の八時から一時まで、セクシユアル・マイノリティーを支援する団体から、警察官、学校の先生、カンタス航空とあらゆる団体のきらびやかな山車が練り歩きます。私も含め、皆が少しでもよく見えるよう一つ一〇ドもするプラスチックの椅子を買って上に乗りパレードを楽しみました。一部ではマルデイ・グラ・パレードはエンタ

ーテインメント化しているとの批判の声もありますが、セクシユアル・マイノリティーの方々のこれまでのつらい経験を知ると共に、現在の生き生きとした姿の二つの面を見ることはとても意義深い経験でした。

おわりに

このプログラムで、文化や宗教、肌の色や言葉が違えど、同じようなことで笑い、驚き、涙すること、そして日本は世界の中の一つの国なのだという当たり前のことを再確認しました。けれど、日本人は日本が国際社会のメンバーだという感覚を持っているのでしょうか。日本で国際ニュースがあまり報道されないこと、そして日本の難民認定者数の低さはその答えを示していると思います。

また、フィールドワークで、移民大国のオーストラリアでさえ医療通訳という分野は、まだまだ課題が残っていることが分かりました。

二〇二〇年の東京オリンピック、更にはその先の将来の日本を見据

えて、医療通訳に関して日本社会にも受け入れられるようなシステム、環境作りを考えていきたいと思っています。このプログラムに参加して、この報告書には書ききれませんが、

いほどの貴重な経験をさせていただきました。この場を借りて、両親、プログラムにかかわった先生方、メンターのベンに御礼申し上げます。



ホストファミリーとの集合写真